世界の日本研究

JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2014

日本研究の隆盛

JAPANESE STUDIES IN FLORESCENCE

郭 南燕　編

Edited by Nanyan GUO

国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies

表紙図版
ド・フリース , W.H.『オランダ本土と海外領土の園芸植物誌 第3巻』（1856 年）所収
W.H. de Vriese. *Tuinbouw-flora van Nederland en zijne overzeesche bezittingen; 3.d.*
（国際日本文化研究センター所蔵）

Japanese Studies around the World 2014
世界の日本研究 2014

非売品

編　者　郭 南燕
発行日　2015 年 3 月 6 日
発　行　国際日本文化研究センター　海外研究交流室
京都市西京区御陵大枝山町 3-2（〒 610-1192）
印　刷　株式会社　図書印刷同朋舎

© 国際日本文化研究センター
ISBN 978-4-901558-73-0

目 次

Table of Contents

序—Introduction　郭南燕 Guo Nanyan　5

第4回人間文化研究機構日本研究功労賞記念講演
ヨーロッパから見た日本文学——芥川龍之介を例として
イルメラ・日地谷=キルシュネライト　9

Europe

The World's Largest Organization Promoting Scholarship on Japan:
The European Association for Japanese Studies (EAJS)　Harald Fuess　23

A New Trend in Japanese Studies at Heidelberg University
Anna Andreeva　25

Japanese Studies and Area Studies at the University of Leipzig
Elisabetta Porcu　31

Japanese Studies in Latvia:
A Historical Perspective and the Present Situation　Agnese Haijima　36

ロシアにおける日本研究の歴史と現在　エカテリーナ・レフチェンコ　48

ギリシャにおける日本研究の過去と現在
スティリアノス・パパレクサンドロプロス　55

Research outside Japan on Japanese Landscape Gardening and
Flowering Cherries　Wybe Kuitert　63

Asia

新時代におけるベトナムの日本研究　ファン・ハイ・リン　69

韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究動向　鄭 鎏　80

韓国における日本儒学の研究　朴 暎美　88

21世紀の中国における抗日戦争史の研究　徐 勇　96

中国の日本研究叢書ブーム　唐 権　104

復旦大学における日本研究の現状　戴 暁芙　117

当代中国における日本史研究の概況について
——主に前近代史を中心に——　張 翔　123

A Survey of Japanese Studies in Mongolia:
Focusing on Choi. Lubsangjab University of Language and Civilization
Borjigin Lubsangjabyn Soyombo　127

North and South America

ブラジルにおける日系移民の母語・子弟教育研究の現状と課題
根川 幸男　131

The Current State of Japanese *Yōkai* Studies in North America
Michael Dylan Foster　145

Essays

「寿司」に秘められた日本の文化力
——梅原猛先生米寿記念特別講演を聴いて——　陸 留弟　153

What I Talk about When I Talk about Haruki Murakami　Nguyen Anh Dan　157

Murakami Haruki and Young Vietnamese Readers　Ngo Tra Mi　171

Report of Overseas Symposium

台湾における満洲地域文化研究の現状瞥見：備忘録ノート　稲賀 繁美　177

結び　郭 南燕　187

執筆者一覧　188

世界の日本研究　JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2014

日本研究の隆盛

Japanese Studies in Florescence

郭 南燕　編

Edited by Nanyan GUO

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

©2015 International Research Center for Japanese Studies

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.
No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published 2015
by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075) 335-2091
URL: http://www.nichibun.ac.jp
ISBN 978-4-901558-73-0

目 次

Table of Contents

序—Introduction　郭南燕 Guo Nanyan　5

第4回人間文化研究機構日本研究功労賞記念講演
ヨーロッパから見た日本文学——芥川龍之介を例として
イルメラ・日地谷=キルシュネライト　9

Europe

The World's Largest Organization Promoting Scholarship on Japan:
The European Association for Japanese Studies (EAJS)　Harald Fuess　23

A New Trend in Japanese Studies at Heidelberg University
Anna Andreeva　25

Japanese Studies and Area Studies at the University of Leipzig
Elisabetta Porcu　31

Japanese Studies in Latvia:
A Historical Perspective and the Present Situation　Agnese Haijima　36

ロシアにおける日本研究の歴史と現在　エカテリーナ・レフチェンコ　48

ギリシャにおける日本研究の過去と現在
スティリアノス・パパレクサンドロプロス　55

Research outside Japan on Japanese Landscape Gardening and
Flowering Cherries　Wybe Kuitert　63

Asia

新時代におけるベトナムの日本研究　ファン・ハイ・リン　69

韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究動向　鄭 鎏　80

韓国における日本儒学の研究　朴 暎美　88

21世紀の中国における抗日戦争史の研究　徐 勇　96

中国の日本研究叢書ブーム　唐 権　104

復旦大学における日本研究の現状　戴 暁芙　117

当代中国における日本史研究の概況について
——主に前近代史を中心に——　張 翔　123

A Survey of Japanese Studies in Mongolia:
Focusing on Choi. Lubsangjab University of Language and Civilization
Borjigin Lubsangjabyn Soyombo　127

North and South America

ブラジルにおける日系移民の母語・子弟教育研究の現状と課題
根川 幸男　131

The Current State of Japanese *Yōkai* Studies in North America
Michael Dylan Foster　145

Essays

「寿司」に秘められた日本の文化力
——梅原猛先生米寿記念特別講演を聴いて——　陸 留弟　153

What I Talk about When I Talk about Haruki Murakami　Nguyen Anh Dan　157

Murakami Haruki and Young Vietnamese Readers　Ngo Tra Mi　171

Report of Overseas Symposium

台湾における満洲地域文化研究の現状瞥見：備忘録ノート　稲賀 繁美　177

結び　郭 南燕　187

執筆者一覧　188

序—Introduction

郭　南燕
Guo Nanyan

本冊子は、国際日本文化研究センターで研究活動を行う外国人研究者と所内教員が執筆した海外の日本研究に関する報告集である。昨年に次いで、今年も刊行する運びとなった。

今号の特色は、海外諸国、大学、専門分野における日本研究の隆盛を示すことである。昨今、日本経済の低迷によって、日本研究が中国研究・韓国研究に押され気味で、日本文化に対して関心が薄くなってきたのではないかと思われがちであるが、実際にはそうではない。日本研究が活発に推進されていることがこれらの報告を通じて分かる。経済の成功か否かにかかわらず、日本文化への深い関心のゆえに、日本研究が活発化していることが現実である。

最初の報告は、ベルリン自由大学のイルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏による第４回人間文化研究機構日本研究功労賞受賞時の記念講演録「ヨーロッパから見た日本研究—芥川龍之介を例として」をそのまま掲載させていただくものである。氏は、日本経済の盛衰によって海外の日本研究を判断することは間違っているとし、ドイツで日本研究が盛んである実情を紹介してくれる。さらに、日本国内の文学研究にありがちな作家の伝記的事実への執着はむしろ作品の解読をないがしろにしていると指摘する。具体的には、芥川龍之介の『侏儒の言葉』を、ヨーロッパの警句との比較において読めば、芥川の先鋭性と普遍性がわかり、『手巾（はんけち）』を緻密に読めば、当時の様式化、演劇化、宗教化された「武士道」を批判する芥川の、近代日本の文化に与えた優れた貢献を理解することができるだろう、と述べる。

ドイツ・ハイデルベルク大学の Harald Fuess 氏の報告は、日本研究を推進する世界最大組織「ヨーロッパ日本研究協会」（European Association for Japanese Studies）の現状を教えてくれる。ヨーロッパにおける日本研究は近年、日本語の学習者数と日本研究のレベルが空前のものとなり、日本の GDP が世界３位に落ちたことを憂慮する必要はないという。氏はヨーロッパの日本研究を発展させていくために、博士課程学生の日欧交流と、日欧共同で学術書を刊行することを提言する。

同じハイデルベルク大学のAnna Andreeva氏は、2007年に組織された「世界におけるアジアとヨーロッパ」という優秀研究群（Cluster of Excellence）を紹介している。この研究群は多文化接触（transculture）という視点から、日本の言語・産業・政治・宗教・絵画・写真・ジェンダーなどを研究し、ドイツの日本研究における課題の新しさが見られるとしている。

ドイツ・ライプツィヒ大学のElisabetta Porcu氏の報告は、地域研究センター（Center for Area Studies）と日本研究学科の研究状況を示す。センターの中心テーマは「文化接触とグローバル時代の政治秩序」で、多地域・多分野にまたがる研究が特色だとする。氏自身の現代日本の宗教とポピュラーカルチャーに関する研究も披露してくれる。

ラトビア大学のAgnese Haijima氏の報告では、ラトビアと日本との外交関係、日本語・日本文化の教育の始まり、日本文学の翻訳の現状、研究者たちの経歴を紹介している。日本研究が始まってまだ日は浅いが、徐々に発展していく勢いがついているという。

ロシア極東国立人文大学のエカテリーナ・レフチェンコ氏は、ロシアでは近年、日本研究者が減少しているものの、研究書と論文の数が増えたことにより、日本語学習者は増加していることを報告してくれる。一方、ギリシャ・アテネ大学のスティリアノス・パパレクサンドロプロス氏は、ギリシャの大学では日本学科の設立が困難であり、日本研究の進展が遅いことを報告し、数少ない日本研究者の懸命な努力に言及する。

日本庭園の研究者である韓国・ソウル大学校のWybe Kuitert氏は、ヨーロッパにおける日本庭園の研究史と同時に、氏自身の禅庭園に関する研究成果を紹介する。氏の研究は英語で刊行されているが、日本人研究者に注目されていないため、日本国内の禅庭園の研究を十数年遅らせていると指摘。さらに、ヨーロッパでは日本庭園の資料調査が不足し、研究に限界があるのに加え、日本人研究者が海外の日本研究にあまり興味を示さないため、学問の進展と交流が阻害されている現状を教えてくれる。

アジア地域の日本研究に関しては、ベトナム国家大学ハノイ校のファン・ハイ・リン氏が、ベトナムと日本の両国関係を辿り、ベトナムにおけるここ40年の日本研究の進展と多くの研究書の出版について紹介する。日本関係の資料と文献が不足しているにもかかわらず、多面的に日本研究を行っているベトナムの研究者の取り組みは印象深い。

韓国・檀国大学の鄭鑾氏は、日本古典文学の韓国語翻訳の概況に加え、日本近世期の人文学に関する学術書と翻訳を紹介し、近年、韓国の日本研究には細分化と多様化が見られ、韓日比較研究が活発化し、また、中国を視野に入れた東アジアという角度からの日本研究も始まっているとする。同じ檀国大学の朴暎美氏の「韓国における日本儒学の研究」は、荻生徂徠と伊藤仁斎を中心とする研究成果と朝鮮儒学との比較研究を概観することにより、韓国の日本儒学の研究は、日本に留まらず、アジア全体の儒学研究に貢献し得ると指摘する。

北京大学の徐勇氏の「21 世紀の中国における抗日戦争史の研究」は、今世紀の中国における、日中戦争に関連する軍事・歴史・経済・産業・文化・教育・出版など、多分野にわたる研究の盛況ぶりを詳しく述べる。上海・華東師範大学の唐権氏の「中国の日本研究叢書ブーム」も、日本研究の隆盛がもたらした大量の叢書類の出版について取り上げ、中国人研究者の著書だけではなく、日本や欧米の日本研究書の翻訳も含まれていると指摘し、叢書の出版は日本研究を推進しているだけではなく、中国の人文学研究の向上に貢献しているとする。

上海・復旦大学の戴暁芙氏の報告は、復旦大学日本研究センターの活発な研究を概観すると同時に、日中関係の後退により、若者の日本への関心度が低下していることにも言及する。同じ復旦大学の張翔氏の報告は、中国の日本史研究は、漢文文献が中心である古代日本と、現代日本語文献が中心となる近現代史に集中する傾向を指摘し、日本史の研究概況を紹介する。

モンゴル Choi. Lubsangjab University of Language and Civilization の Borjigin Lubsangjabyn Soyombo 氏は、1993 年に設立された同大学を紹介し、日本語教育が近年盛んになり、日本研究もこれから展開していくという見通しを示す。

ブラジル・ブラジリア大学に勤務経験のある根川幸男氏の報告は、ブラジル日系移民の子弟教育に関する先行研究、研究の現状、将来の課題を紹介するとともに、多民族国家ブラジルにおける日系移民の二言語・二文化の教育を詳述し、当研究分野の学術的意義を教えてくれる。

米国・インディアナ大学の Michael Dylan Foster 氏は、北米における日本の妖怪マンガ・アニメの享受、妖怪研究の進展、それに関する学術書について報告する。妖怪研究は、日本の伝統芸術としてだけではなく、現代日本の大衆文化としても研究され、注目されている。妖怪の登場するマンガ・アニメに対する学生や社会人の関心が、妖怪研究を促進する力になっていると指摘する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

以上の報告に続いて、海外研究者の日本文化と文学に関する随筆を三本掲載する。上海・華東師範大学の陸留弟氏は、寿司の形や色、盛り付けなどの視角的効果に深い興味を示し、世界に行き渡る日本食文化の波及力に注目する。ベトナムのフエ教育大学の Nguyen Anh Dan 氏とベトナム国家大学ホーチミン社会科学校の Ngo Tra Mi 氏は、村上春樹の文学に熱中するベトナムの若者の心理をそれぞれの読書経験から描写してくれる。

日文研の稲賀繁美氏の「台湾における満洲地域文化研究の現状瞥見」は、2013 年 3 月 19 日に、台湾中央研究院・人文社会科学研究中心・アジア太平洋区域研究専題中心が主催した懇談会での研究報告と発言を整理し、日本の植民地だった台湾と満洲はいずれも周縁地域とされ、中国文化史から排除された共通点があること、また、台湾では人的資源や資料の蓄積が豊富であるため、台湾を中心とする満洲研究の必要性が論じられたことを紹介する。稲賀氏は、満洲国を「偽」という一字で片付けて満洲の歴史を改竄した問題や、満洲で実験した多民族国家の理念を考察し、帝国日本の世界規模の移民政策の中に満洲問題を位置づける必要があると指摘する。

以上、本報告集では、世界各地で生まれている新しい角度からの日本研究の成果と同時に、日本研究が進行していない地域の問題を紹介する。日本研究の現状を把握するうえで有用なデータも多いので、研究推進のために役立つことを期待している。

第4回人間文化研究機構日本研究功労賞記念講演
ヨーロッパから見た日本文学——芥川龍之介を例として

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト

つい最近私は、東京のある大学の研究所から送られてきたニュースレターの中に、「世界各地における“日本学”は、日本の経済的地位の低下とともに、かつての勢いが失われたと言われている」とあるのを読み、驚きました。なぜなら、私は全くそのように思ってはいないからです。この“日本学の勢いの失墜”が、具体的に何を指しているのか、また一体誰がそのようなことを言ったのかなど、そこには説明されていないのですが、一口に「世界各地の日本学」といっても、当然、国ごとに歴史的背景やその規模、研究分野など、大きな差があるはずですので、すべてを一纏めにして扱うのはどうかと思います。いずれにしても、「日本の経済的地位の低下」というものに付随して、まるで当然のように、各国の日本学の勢いが失われるとの理屈は、そのまま受け入れるわけにはいきません。それではまるで、海外の日本学とは、毎日上がり下がりを繰り返す株価のように、研究対象である日本の経済状態によって、その盛衰が決まる学問であるかのように聞こえるからです。そのような発想は、学問的営為（いとなみ）というものに対する誤った認識に根ざしているとしか思えず、このニュースレターの表現は、誤解を招く恐れのある、かなり曖昧で不正確なものだと言えるでしょう。

そこで、「勢いが失われた」とされる「世界各地の日本学」の一つの例として、私がある程度は知っている、ドイツの日本学を眺めてみましょう。日本を対象とする研究は、ずっと以前から行われていましたが、大学組織に組み込まれた日本研究、いわゆる日本学がドイツで始まったのは、今からちょうど100年前のことでした。偶然にも、本日12月11日（2014年）、ハンブルク大学で、その100周年を記念する式典が行われることになっています。100年前に産声を上げた日本学（ヤパノロギー）は、その後の歴史的変遷を辿って現在に至ったわけですが、では、その日本学の今の状況はどうなのでしょう。ドイツの日本学も、やはり勢いを失いつつあるのでしょうか。

数字がすべてを表すとは思いませんが、少なくとも、現実の一端は示してく

れるはずです。ドイツ連邦統計局の2011／12年度の統計によりますと、ドイツの各大学で日本学を学んでいる学生の数は、同じ東アジアの学問である、中国学と韓国・朝鮮学の学生数の合計をはっきり上回っています。それは以前から続いていた傾向ですが、中国と韓国の台頭が明らかになった現在でも変わっていません。近年ドイツのメディアがたびたび報道してきた日本の状況は、経済大国としての停滞、デフレ現象、進まない政治改革、少子高齢化、格差社会、原発問題など、かなり悲観的な内容にもかかわらず、ドイツの若者の間では、日本に対するポジティブな見方・考え方が今でも続いているという事実を、この統計の数字は表していると思われます。大学入学時の専攻分野の選択は、ドイツの若者にとっても、自らの将来がかかった重要な決定であるはずです。

もちろん、統計の数字だけを使った日本学の描写は、先に申し上げましたように、限定された不完全なものです。そこで、ドイツの日本学はどのような研究成果を上げているかの例として、ここ十数年の間にドイツで出版された二つの研究書を、ドイツ日本学の一つの側面を映すものとして取り上げ、私自身の考えや意見を織り交ぜて皆さんにご紹介したいと思います。私の選んだ研究書のテーマが両者共に芥川龍之介、つまり文学研究であるのは、もちろん、それが私の専門分野だからですが、本講演の目的・方向性などを明確にするために、テーマをあえて芥川龍之介一人に絞りました。

私自身、これまで芥川龍之介に深く踏み込んだ研究をしたことがなかったのですが、芥川について考える時、そこにはある不思議なアンバランスが見えてくるようです。それは、この作家の高い知名度と、彼の文学の一般的な受容度との間に存在する、一種の不均衡のことです。芥川の生涯は私たちの時代の平均に比べればかなり短く、その死からすでに90年近く経っていますし、彼の死後も、日本には新たに無数の文学者が登場しているにもかかわらず、芥川文学が放射する輝きは、今でも決してその力を弱めてはいないのです。ドイツ語圏において、これまで約130の作品が翻訳・発表されてきた芥川は、その数からいえば、最も多くの作品が紹介された日本の作家ということになるのですが、もしかしたらそれは、芥川作品のコンパクトさ故であるかもしれません。しかし、何度もドイツ語訳された作品がいくつも存在し、中には6回も翻訳された作品があることもまた事実です。しかし、それは芥川が欧米において最も有名

な日本の作家であることを意味してはいません。そこにある種の矛盾を見ることもできるのですが、いずれにしても、20世紀初頭の日本において、存命中すでに作品が欧米語に翻訳された数少ない作家の一人が芥川であり、国際的に見ても彼の名は、日本映画史上の金字塔ともいうべき作品や、日本で常に注目を集める文学賞とも結び付けられ、特別な存在感やオーラを付加されているのかもしれません。

私にとって芥川龍之介とは、日本の近代における文化史的発展や、精神史的方位確認などの問題が交差している場所でもあります。型通りかも知れませんが、芥川を通して私は、例えば「自然主義」「私小説」「唯美主義」「モダニズム」、あるいは「マルクス主義」「プロレタリア文学」、さらには「キリスト教」「西洋文明・文化」など、多くの中心的なキーワードに触れることができるのです。芥川においてそれが可能なのは、いささか逆説的に響きますが、彼が日本の近代における特定の文化史的・精神史的流れなどに属さなかった、孤高（ソリチュード）の存在であったからだと思われます。それらのテーマはいずれもが、日本の近代との取り組みにおける交差点・分岐点を示しており、その中のどれを取り上げても、欧米で日本に関心を寄せる者に、日本の近代と取り組むための糸口を与えてくれるはずです。

例えば、これまで多くの解釈が存在する、芥川と私小説の関係を取り上げてみましょう。芥川の文学活動を、歴史物が多く書かれた初期から中期と、自伝的な要素がそこに加わり、小説のプロットをめぐる谷崎潤一郎との論争などもあった後期とに分けるという、かなり広く認められているパターンでは、多くの研究者がその後期を、芥川が私小説に接近していった時期と見ており、『歯車』や『或る阿呆の一生』などの作品は、私小説ジャンルに属すると考えられているようです。芥川自身は、私小説というジャンルやそれに類する書き方からはっきり距離を置いていたようですが、同時に、自分を「書きたがる病」であると認めてもいました。芥川はいかにも彼らしく、その病気をラテン語で“Cacoethes scribendi”と名づけていますが、それは、ローマ帝国時代の風刺家ユベナールの風刺集にある、「治癒不能な書きたい欲望—insanabile…/scribendi cacoethes」から引用したということです。古代ローマの詩人を自己描写のために利用するという、芥川の知識人気質と皮肉なポーズは、私小説作家たちが目指していた、正直で直接的な描写を信奉する態度からは明らかに距離を置いているように見えます。しかし、芥

川の例は同時に、文学作品の受容において、その作品が私小説であるか否かという問いが、当時いかに重要であったかをも示しているのです。

芥川は、一時期文学界を席捲した私小説作家たちとほぼ同時代人であり、そのジャンルに近かった久米正雄などとも親しかったのですが、忘れてならないのは、芥川が当時すでに社会的に非常に有名な、ほとんどスター的存在だったことです。その結果、個人としての芥川にも読者の関心が集まっていました。私見によれば、私小説とは、作家、作品の主人公、読者の三者が織り成す共生・共存（シンビオーゼ）として成立しており、特に1910年代・20年代の日本の文学愛好者らは、有名作家の履歴や日常生活などにかなり精通していたようです。覗き見主義ともいえる、そのような読者の関心こそが、私小説の成立と興隆のための必須条件だったと思われるのですが、そこで重要となるのは、長期にわたって日本の文学研究を覆っていた、ある作家の伝記とその作品を比較対照するという、自伝主義的・実証主義的な傾向は、おそらく、私小説というジャンルが日本の文学世界全体に及ぼした強い影響から生み出されたという事実です。そう考えると、芥川作品が私小説に連なるかたちで連想されてしまうのは、避けることのできない、当然の帰結ということになるでしょう。しかしそのような連想は、芥川文学の性格やスタイルとはあまり関係がなく、むしろ、当時の日本で文学作品というものがどのように見られ、受容されていたかの証左と言えます。この問題をさらに解きほぐしていくためには、当時一括して“文壇”と呼ばれていた、文学サークル群の特殊な性格や形態にも触れる必要があるのですが、ここでは省略します。

以前かなり集中的に私小説という現象と取り組んだことのある私には、芥川は他との関連で非常に興味をそそられる存在です。そしてそれは、文学研究にとって基本的な問いでもあるのです。私小説は、純文学、つまり芸術作品として理解されています。その芸術的文学と、日常の実用的テキストとは、通常かなりはっきりと区分されており、後者に属するのは、例えば文学としては書かれなかった日記や手紙、あらゆる種類の雑記、文献、メモの類ですが、芥川において特徴的に見られるのは、個人的・日常的記録と見える自身の日記に記された文章が、ほとんどそのまま作品に登場することです。もちろん、作家が自分の日記内の書き込みを文学作品の材料として利用することは十分考えられます。特に、その作品が自伝的性格を持つ場合は。しかし、日記に書かれた、い

わば“原材料・生の素材”と、文学のかたちを取った“製品”の間に差がない場合、一体どうなるのでしょう？この点について私は以前、芥川の日記を下敷きとして論じたことがあります。1919年5月26日の日記に記された、谷崎潤一郎との交友に関する簡潔なメモは、そのままのかたちで、芥川の二つの文学作品、つまり、二つの“フィクション”の中に登場するのです！果たしてそこに、いわゆる実用的文章と芸術的文章との間のカテゴリー的差異を特定できるのかと私は考えたのですが、結果、それは無理だと分かりました。日本において昔から高く評価されており、「私小説」もそこに属すると考えられている、「随筆」や「日記」などのジャンル間の互いの境界が非常に曖昧な関係を把握するためには、おそらく、文芸学的に見て、全く異なったカテゴリーシステムが必要だと思われます。一体何が文学性で、何が芸術としての文学なのかとの問いには、谷崎との論争の際、芥川自身も触れています。一部の研究者は、芥川が谷崎との論争で何を言いたかったのかよく解らないと不満を述べているようですが、芥川・谷崎論争では確かに、芸術としての文学に関する根本的・理論的な問題が議論されており、それは今日に至るまで、国籍とは関係なく、各国の文芸学で議論され続けている問いでもあるのです。

もし芥川の芸術が文芸学全般に刺激を与えるものであるならば、そこには当然、ジャンル研究という分野も含まれるはずです。芥川が、短編や中編小説、和歌、発句、旋頭歌、現代詩、エッセイ、芸術評論、超現実主義的映画の脚本など、多くのジャンル間を縦横に駆け巡り創作していたことは知られていますが、ほとんどの場合、短い形式の分野だけを活動の場としていたことを、この作家の弱点と見る人々もいます。つまり、芥川は長編小説、いわゆるロマンのような、大きな構成力を必要とする創作が苦手とされ、加えて、新しい試みに傾きがちであった彼の創作態度も否定的に取られ、確固とした方向性や独自のスタイルが欠如していると解釈された、そう思われるのです。私はこれまで芥川についての評論を読むたびに、彼の創作上の多面性や実験的試みなどがいかに否定的に受け取られているかを知り、驚いたものです。現在ではむしろ、芥川が批判を浴びた側面である「断片性」「ハイブリット性」「アンビヴァレント」などの要素こそが、近代を象徴する性格であると考えられています。芥川が1926年に、ありとあらゆるジャンルを意識的に試みたいと表明していたことを思い出してみましょう。今日、芸術作品においては「未完結性」「断続性」「朦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com